

MMPI 新日本版の項目を用いた MAS の 信頼性・妥当性の検討

○ 松本圭
(金沢大学文学研究科)

石川健介
(金沢工業大学)

目的

顕在性不安尺度 (Manifest Anxiety Scale, 以下 MAS) は被検者の不安の高さを測定する尺度として普及しているもののひとつである。MAS は Taylor (1953) において、総合的な人格検査である MMPI から、50 の顕在不安項目を抽出することで作成された。日本語に翻訳されている MAS は数多く存在するが、現在、我が国で広く使用されているのは阿部・高石 (1968) による MAS であろう。この MAS は 50 の顕在不安項目に 15 の MMPI-L 尺度を加えた、65 項目からなっている。

一方で、MAS の基となっている MMPI の日本語版については、日本版 MMPI から MMPI 新日本版へと改訂されている (MMPI 新日本版研究会, 1993)。MMPI 新日本版の標準化の過程では、項目の日本語訳の見直しがなされ、基礎尺度の信頼性・妥当性について確認されている。その MMPI 新日本版においても追加尺度の一つとして MAS が存在する。したがって現時点では MAS という同じ尺度名で、日本語訳の異なる 2 つの尺度が使用されることとなっている。日本語訳の適切さや標準化された時期が新しいことなどを考慮すれば、新しく標準化された MMPI 新日本版の項目を用いた MAS を使用するのが妥当であると思われる。しかし、MMPI 新日本版の項目を用いた MAS について詳細な検討は行われていない。

そこで本研究では、MMPI 新日本版の項目を用いた MAS の信頼性・妥当性を確認する

ことを目的として調査を行った。

方法

対象 北陸地方の中核都市の大学生および看護学生 875 名 (男 452 名, 女 423 名) を対象とした。平均年齢は全体 19.2 歳 (SD1.55), 男性 19.2 歳 (SD1.42), 女性 19.1 歳 (SD1.68) であった。

質問紙 MMPI 新日本版から、阿部・高石 (1968) の MAS と同じく顕在不安項目 50 項目と MMPI-L 尺度の 15 項目を抜き出し冊子に編集したものを使用した。項目の順序は阿部・高石 (1968) の MAS と同じくした。回答方法の教示については、MMPI 新日本版の教示を質問項目の始まる前のページに挿入した。なお、以下の分析には 50 の顕在不安項目のみを用いた。また、今回使用した MAS を以下、MAS 新日本版とする。

実施方法と実施時期 1998 年 4 月～1999 年 9 月にかけて、各学生の授業中に回答を求め、その場で回収した。

結果と考察

1. MAS 新日本版の信頼性 (内的整合性と再検査信頼性) の検討

全対象者の顕在不安項目に対する回答から、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .89$ となり、MAS 新日本版が高い内的整合性を有することが認められた。

MAS 新日本版の再検査信頼性を測定する目的で、全対象者の内、77 名の看護学生 (全員女性) については 2 週間間隔で、90 名の看護学生 (全員女性) については 2 ヶ月間隔でそれぞれ再検査を実施した。それぞれの 2

回の MAS 得点についてピアソンの積率相関係数を算出したところ、2 週間間隔で .93、2 ヶ月間隔で .89 (いずれも $p < .001$) と高い値が示された。したがって MAS 新日本版は高い再検査信頼性を有するといえる。

2. MAS 新日本版の妥当性 (収束的妥当性・因子的妥当性) の検討

MAS 新日本版の収束的妥当性を確認する目的で、全対象者の内 83 名の看護学生 (全員女性) については MAS 新日本版に加えて、日本版 STAI (水口・下仲・中里, 1982) を実施した。そこで得られた回答から、MAS 得点、STAI の特性不安得点、STAI の状態不安得点、それぞれの得点間のピアソンの積率相関係数を算出した (Table 1)。その結果、MAS 新日本版は STAI の特性不安得点、および状態不安得点のいずれとも有意な相関を示し、特に特性不安得点との相関が高いことが明らかとなった。このことから MAS 新日本版は収束的妥当性を有するといえる。

MAS 新日本版の因子構造を明らかにするために、全対象者の 50 の顕在不安項目に対する回答について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、それぞれ「自信喪失」、「神経質と反芻思考」、「過覚醒」、「赤面恐怖」と解釈される 4 因子構造を採用した (Table 2)。今回得られた MAS の因子構造は先行研究と概ね類似し (例えば Livneh & Redding, 1986; O'Connor, Lorr, & Stafford, 1956 など)、したがって MAS 新日本版は因子的妥当性を有するといえる。

まとめ

本研究から、MMPI 新日本版の項目を用いた MAS が、十分な信頼性・妥当性を有することが示された。しかし、この MAS 新日本版をより有用な尺度とするためには、外的な規準による基準関連妥当性や、臨床的妥当性などについても確認していく必要がある。

Table 1 MAS 新日本版, STAI-State および STAI-Trait の各変数間の相関係数

	STAI-State	STAI-Trait
MAS	.54**	.81**

** $p < .001$

Table 2 MAS 新日本版の因子分析結果

項目番号	項目内容	因子負荷量			
		I	II	III	IV
【因子 I : 自信喪失】					
53	時どき、私は全く役に立たない人間だと思う	.71	.12	.07	.10
19	時どき、自分は何の役にも立たない人間だと思う	.69	.16	.06	.13
15	私は全く自信がない	.55	.15	.19	.14
【因子 II : 神経質と反芻思考】					
49	物事を深刻に考えがちである	.15	.64	.13	.08
27	くよくよと心配しやすいほうだ	.25	.63	.06	.13
39	たいていの人より、ずっと傷つきやすい	.15	.49	.13	.09
【因子 III : 過覚醒】					
45	とても興奮して、なかなか眠れないことがよくある	.03	.20	.49	.06
29	じっと座ってられないほど、落ち着かなくなる時期がある	.13	.20	.48	.04
60	心配事のため、眠れなかった時期がある	.01	.23	.42	.03
【因子 IV : 赤面恐怖】					
42	ほかの人より顔が赤くなりやすいことはない	-.02	.00	.04	.73
14	顔が赤くなることは、ほとんどない	-.04	-.01	.03	.70
65	顔が赤くなるのではないかと、びくびくすることがよくある	.19	.11	.14	.53
累積寄与率 (%)		15.5	18.7	21.3	23.4